

ミナガワ・テーリは7歳で太学に入学し、神童だとちやほやされて生きてきて、周囲の期待通り順当に大学院に進学した。傍から見れば順風満帆の彼女の人生は、その一方で期待を裏切ることに対する恐怖や年齢不相応な問題に常時悩まされ、勉強ができることが彼女の存在意義なのだという強迫観念、そしてそれらをだれにも相談できないストレスに苛まれる日々だった。

2072年2月29日。彼女の16歳の誕生日のことだ。

『お誕生日おめでとう！ そういえば、もう就職先は決まった？』

彼女のかねてよりの友人、ディーサ・ヨーヌドフテルが、アンシールドというSNSで彼女にたずねた。

「まだ」

『えー！ 修了まであと半年しかないでしょ！ こんな時期にそんなんで平気なの!?』

『数社からオファーは受けてるよ。でも、まだ決心できなくて……』

『テーリならまちがった選択はしないと思ってるよ。なにが決心を鈍らせているの？』

『そんなこと、ディーサに話すことないよ。ぼくが決めることだから、気にしないで』

彼女はどんなことでも彼女だけで考えてしまう側面があつた。それは彼女のストレスの

原因のひとつだが、彼女自身それを認識してもなお、彼女は他人に相談できずにいた。

（いちばん気にしてるのはパンプキン・セキュリティのこと。でもあんこと相談できるわけないし第一、信じてもらえるかどうか……）

パンプキン・セキュリティはアメリカ合衆国のセキュリティ企業で、主にセキュリティシステムの開発をしている。それはマイクロソフトの製品にも採用され現在では世界中で利用されており、業界ではそこそこ有名な企業だ。

彼女の専門はセキュリティだったので、同社を受けない理由はなかつた。

同社と彼女は最初メールでやりとりし、それ自体は普通のことだが。（思えばあのときから奇妙な会社だった。ぜんぶ知つてて確認のために質問してきてた。ぼくがうそを言う人間かどうか試すみたいに……）

さてここで話は一昨年、2010年11月に遡る。

テーリは当時14歳。D2で就職を視野にいれていたため、そろそろインターンを経験しようといろいろな会社に応募していた。

彼女ほどの神童であればどんな企業でも採用したいと思うだろう。  
ところが結果は全敗。理由は明白。

とある一社との面談でのやりとりはこうだった。

「能力は十二分だが、たとえ学歴があろうと14歳の児童を働かせるわけにはいかない」

「児、児童!? ぼくが児童ですって!」

「きみがそうじやない大人と同じだけの知識と知性のある聰い女性だというのは認める。でもわかつてくれ。法的にはきみは児童なんだ。だからインターんは受け入れられない。こういうのは児童労働になつてしまふからね」

「でも、法律では満13歳以上なら軽易な労働はできるって」

「そこは法解釈の問題で難しい。たしかに基本的にキーボードを叩くだけだから、軽易な労働、と押し通すことはできるかもしない。だが弁護士に相談しないと弊社で判断することはできない。そんな危険は冒せないからね。でも、応援はしている。ひょっとしたら14歳でもできるインターんがあるかもしれない」

彼女が飛び級して大学院生になつたこと、それは彼女の誇りでもあると同時に、彼女の悩みの種でもあつた。児童労働になつてしまふため働くことができない。だから就職活動はどうしても後手後手にまわつていた。

こうして彼女が途方に暮れているとき、唯一パンプキン・セキュリティという会社から好意的な返事があつたのだ。

『弊社は貴女を高く評価している。しかし満15歳以下の者はたとえ学業で異例の成績を収めていたとしても雇用してはならない。そこでもし貴女が16歳に達したとき、もしも未

だ弊社に関心があれば、再度応募して頂きたい。好意的に検討する所存である》このとき、パンプキン・セキュリティと彼女はメールでのやりとりのみだった。しかし彼女はこの前後で奇妙な体験をしていた。

彼女は当時カリフォルニア州フリーモントでひとり暮らしをしていた。オートロックのマンションで、カードキーを使って1階のフロントサッシャを開錠するほか、エレベーターのドアはカードキーを使わなければ開かず、さらにカードキーに記録された階にしか停止しない。果ては彼女が借りている部屋のドアの開錠にもカードキーが必要だった。

ある日の深夜、研究が長引いて帰宅が日付をまたぐ時間になってしまったとき、彼女はカードキーを使ってフロントサッシャを開いて入り、それはすぐに自動的に閉まった。それは一度閉まつたらカードキーを使わなければ開かない。ところが、彼女がエレベーターに乗るときフロントサッシャが開く音がした。エレベーターからフロントサッシャは見えない。（だれか帰ってきたのかな？）

彼女はそう思った。マンションの住人は当然、全員カードキーを持っている。

こういうとき、彼女はエレベーターを開いて待つことにしていた。ご近所づきあいだ。

ところが待てども待てどもだれも入つてこなかつたので、彼女は奇妙に思いつつ、ドアを閉めた。

彼女はマンションの12階の部屋に住んでいた。だから彼女はそこで降りた。そのときエレベーターのすぐ隣にある避難階段をだれかが駆け下りていく音がした。

災害時にはエレベーターが停止してしまう場合もあるので、通常は使わないが避難階段はいつでも使えるよう解放されている。しかしいまは災害時ではない。マンションの住人がわざわざエレベーターではなく避難階段で、それも12階から降りる理由はない。

ただそれでも避難階段で喫煙しているひともたまにいるので、彼女は（だれだろ、こんな時間に。風にでもあたりたいのかな？）

くらいに思う程度だった。

彼女がはつきり危機を認識したのは、その直後だった。

自室のドアが、開いていた。

彼女はカードキーを使うのを忘れてドアノブに手をかけた。するとドアが開いたので、そのとき彼女は違和感を覚えた。

（あれ？ カードキー、使ったっけ……？）

彼女はおっちょこちよいで、カードキーを使い忘れるることはたびたびあった。

（あれ？ 今日もしかして鍵かけ忘れた？）

彼女は最初、そう思った。しかしすぐに避難階段で何者かが駆け下りたのを思い出し、ぞ

わっとした。

（もしかしてだれかぼくの部屋に入った……？　どうしようどうしよう。こわいこわいこわいこわい）

彼女は結局警察に相談できず、それからそういったことはなかつたので忘れてしまい、それをパンプキン・セキュリティと関連付けることはなかつた。

それから半年ほどして2071年4月、彼女はパンプキン・セキュリティに連絡した。  
『先月ぼくは15歳になりました。まだ16歳ではありませんが、16歳になるのはD3です。D3になってから就職活動をしても遅いと思っています。そこでいまのうちに面談して、もし内定を頂けるようでしたら16歳になってすぐに雇用契約を結ぶ、ということは可能でしょうか』

同社からの答えは、こうだった。

『書類選考は済んでいます。ひとまず面談に移りましょう。一度弊社のオフィスにお越しください』

こうして彼女はパンプキン・セキュリティのオフィスへ面談に向かつた。

同社オフィスの会議室で彼女は鋭い眼光で白髪が混じり、無精ひげが目立つ初老の男性と対面して面談を行うことになった。かれのほかには面接官はいなかつた。

男性は40歳前後に見えた。かれは白いスーツに赤いネクタイをしていて、面接中ゆえ当然いまはたばこを吸っていないものの、染み付いた臭いは明らかにヘビースモーカーのそれで、テーリはそれを嗅ぐだけですこし反射的に咳きこんだ。

「平気か？」

男性はテーリにたずねた。

テーリはたばこがあまり好きではないが、面接中なのであえてそれを指摘はしない。

「ええ、問題ありません」

「そうか。まずは自己紹介からいこう。おれはパンプキン・セキュリティ最高経営責任者ジョージ・マウンテン」

「スタンフォード大学修士、ミナガワ・テーリ、15歳です。いまは同学のD2で学んでいます」

「すばらしい。まずは秘密保持契約をむすぶことになる。契約書にサインしてくれ」

彼女は秘密保持契約の内容をよく読んだが、なにか順序がおかしい気もしていた。

「あの、質問なのですが、これってNDAで雇用契約ではないんですよね」

「ああ」

「ふつう、NDAと雇用契約は同時にむすぶものではありませんか？　たとえばこのあと仮

に採用されなかつたとして、ぼくはNDAにだけ契約して雇用契約はしないという状況になつてしまいませんか？」

「……そこまで見抜いたのはきみが初めてだ。きみの評価が一段上がつたよ」

「ええ、どういうことです？」

「まあ、雇用契約とNDAはべつに同時にしなければならないわけではない。雇用契約を先にしてNDAは後日別途の場合も、またNDAを先に締結し雇用契約はそれからという場合もある。弊社の場合はこういう手続きだということだ。仮にもセキュリティを売りしている会社だ。採否にかかわらず、NDAを締結しなければ先には進めない」

「……わかりました」

彼女はなにか怪しいなと思いつつも、契約書にサインした。

するといきなりオフィスのほうからぞろぞろとひとが集まってきた。五人。女性ふたりに男性三人。テーリはそのうちひとりを見て目を丸くした。

「まさか、ウォーターズ……長官？」

そう、彼女はセキュリティ業界で崇められさえする有名人、一方向性関数の存在を証明してP+N P問題を解決し、計算複雑性理論や暗号理論等多岐に渡る分野に多大な影響を与えた数学者にして現役NSA長官、グレース・A・ウォーターズ。2072年アメリカ

合衆国大統領選挙にも出馬している。

ウォーターズ長官は褐色で白いくせ毛でなによりいつも目を瞑っているのが特徴的だ。彼女は全盲でまったく光が見えない。長身ですらりとスタイルもよく知的でクールな女性で、全米の女性の憧れの存在と言つても過言ではない。

もちろんテリーにとつても、彼女は興味のある分野でたしかな業績をおさめた成功者で憧れないはずがなかつた。女性としても彼女のかつこいい立ち振る舞いは羨ましかつた。

ジョージ・マウンテンは答えた。

「彼女はNSA長官、ウォーターズ長官そのひとつだ。おれもパンプキン・セキュリティの最高経営責任者ではない。おれは合衆国陸軍所属でそしてNSA本部に配属されている、ジョージ・マウンテン大尉だ」

「ちよちよ、ちよつと待つてください。急すぎます！　ぼくはパンプキン・セキュリティの面接を受けにきたはずで……」

するとウォーターズ長官が厳かに答えた。

「パンプキン・セキュリティは数あるNSAの隠れ蓑的企業のひとつ。その求人もNSAが新たな人材を発掘するためのフェイクだ」

「……ぼくを、スパイにスカウトしているってことですか」

「そうなるな。きみのことはすこし調査させてもらつた。あやしい点はない。そしてきみは優秀だ。きみのような人材がいまの当局には必要だ。私は長官で忙しい。ほとんど採用には関与しないがきみのプロファイルを見てぜひとも直接話してみたいと思つたのだ」

「でもぼくはスペイになるためにここにきたんじゃありません！　NDAを先にむすんだ意味がわかりました。汚いやり方ですね！」

「……直接NSAに応募してくる者を採用するわけにはいかない。二重スペイの可能性があるからだ。わかつてくれ」

「ふたつ、聞かせてください。ぼくの部屋に勝手に入つたのはNSAのかたですか？」

「……ああ。それについては認める。二重スペイかどうか何重にもチェックする必要が」「それとぼくがもし辞退して、こここの秘密を洩らしたらどうするつもりですか。NDAをむすんだからって、ぼくが死なばもろともと告発するかもしれないじゃないじやないですか」「当局はすでにきみを慎重に調べ、そういうた危險性のない人物だと判断したゆえにきみをここに呼んだ。安心してくれ。この秘密を知つたからと言つてきみを監視したりなどはしない。きみを信じる。そういうた人的余裕もないしな」

「わかりました、ありがとうございます」

「そう言つて彼女は席を立つた。

「考える時間をください。まさかこの場で承諾しなければ不採用、なんてこと言いませんよね」

「当局は慎重だがそこまでではない。わかった、後日答えを聞かせてくれ。最後にひとつ伝えておく。実はもうきみにオファーを送ることは決まっているんだ。もしそのオファーをきみが承諾する場合、きみは表向きにはパンプキン・セキュリティの会社員となつて、実在する企業と同等の法的に有効な書類等も発行する。しかし実際にはメリーランド州のNSA本部で勤務してもらう。パンプキン・セキュリティのこのオフィスは、世界各国に点在するNSA支部のひとつでここで勤務しても構わないがきみの経歴は支部で働かせるには惜しい。ぜひとも本部にほしい人材だ。その前提で考えておいてくれ」

その後テーリはマンションでNSAについて調べていた。彼女は過去にNSAについて興味本位で調べたこともあつたが、あんなことがあつたので、これまでよりずっと真剣に調べていた。

だがNSAに関するネット上の情報はどうにも信憑性の薄いものばかりだった。

とはいえ給与水準くらいはわかつた。正確にはそれも公式には非公開情報だが、複数のリーク情報からすると公務員の平均的なそれと変わらず初任給はそんなに期待できない。映画で見るようなセレブリティなスペイはどう考えてもCIAやNSAのなかでもトップ

クラスで、最初は下つ端だからそこまで給料ができるとは思えなかつた。その点世界企業は初任給の水準が高く明らかに太つ腹で若くてお金のない彼女にはそれが魅力的に見えた。（NSAって結局、国家公務員だから最初はお給料そんなよくないんだね。パンプキン・セキュリティ、給与水準は非公開だけどなんとなく給与水準高いイメージで応募したけどぜんぜんそんなことなかつた。これだつたら仙丹製薬セキュリティ部門に就職したほうがいいなあ。仙丹製薬も16歳以上だつたら正社員として考えるつて返事だつたし……）

彼女はいろいろ計算していた。

（でも台湾本社じゃなくてカリフォルニア支社でも同じ給与水準なのかな……）  
また別の会社も検討する。

（シンガポール・ロボティクスの初任給は公開されてて正社員の給与はすごい良い。それにやつぱり16歳以上だけ正社員になれる。でもオフィスがシンガポールにしかなくていちおうフルリモート枠はあるけどそれでも同じだけもらえるのかな……）

彼女はがつくしきていた。

（だいたいカリフォルニアにはいろいろIT企業があるのでどれもこれも！　18歳以上じゃないと！　正社員としては雇ってくれないんだもん！　は～あ、このままだと16歳で大学院修了しちゃう。なんとしてでも16歳で正社員になれる会社を見つけないと……）

でも、急いで NSA に就職してもお給料はあんまりよくない……

ほどなくして NSA からの内々定の連絡がきたが、どの道 16 歳になるまで雇用契約はできないので、返事はそれからでよいとのことだった。

そして話は冒頭へ戻る。2072 年 2 月 29 日、テーリの 16 歳の誕生日のことだ。

『お誕生日おめでとう！ そういえば、もう就職先は決まった？』

「まだ」

「えー！」

「数社からオファーは受けてるよ。でも、まだ決心できなくて……」

このとき彼女にはいくつか選択肢はあった。給与水準だけで選べば仙丹製薬が最大手と言えた。NSA と仙丹製薬では給与水準は最低でも 3 倍、役職によっては 10 倍もの差があった。ではなぜ彼女は迷っていたのか。

正義感。

彼女が小さな頃、全米を震撼させる凶悪なテロリズムが起こった。彼女は幼心ながらにそれを見て怒りの感情を覚えたことがあった。

NSA の使命はそういったテロリズムを対策し国防のために必要な情報を集めること。彼女はそういった仕事が価値のあることだと感じていた。

だがそれでも、そんなあいまいな正義感のために年収の低い仕事を選ぶことが合理的だとは、彼女はまったく思わなかつた。

合理的に考えれば仙丹製薬に就職するべきだ。彼女なら年収30万ドルも夢ではない。それにもかかわらず、年収3万ドルの国家公務員と比較して迷つてしまふ。

躊躇せずに仙丹製薬を選ぶことができない。

彼女を迷わせていたのは、彼女自身が無意識にもつ正義感だった。

しかし彼女はそれを認めたくはなかつた。彼女はずつと合理的に選択してきたつもりだし、そんなあいまいな正義感なんてものが天秤を傾ける要因にはならないと、彼女の理性はそう叫んでいた。

（正義感？　ばっかばかしい！　くだらない。くっだらない！　ぼく、なに考えてるの。なに迷つてるの。躊躇することない。仙丹製薬からオファーも受けているんだしそつちに就職すればいい。なぜ迷うの？　NSAとは年収が10倍も違うのに！）

彼女が迷う理由。それを彼女自身分析するに、正義感としか言えなかつた。それは彼女がいままでもつともくだらないと思つてきた感情だ。それだけに彼女の判断を正義感なるものが揺さぶっている事実に、彼女は自己矛盾を感じずにはいられなかつた。

彼女は正義感をもつこと自体を否定したり、ばかにしたりはしなかつた。むしろ彼女は

そういうた正義感を行動に移して結果を残せるひとはすごいしかったことないと感じていた。  
しかし損をするとわかつていて正義のために不利な選択をすることは愚かだとしか思わなかつた。

N S A に就職するというのは彼女にとつて後者の選択だ。

だから彼女は合理的に考えれば自明な選択にもかかわらず迷つてしまふ彼女自身にいらだちを感じていた。

そんなときのことだつた。

12階の部屋まで聞こえるほど、マンションのそばの公道で大きな叫び声がした。男女問わず複数人の声で、テーリは痴話げんかかなにかかと最初は思った。彼女は野次馬気分でカーテンをすこし開き、下のほうを見た。

なんと A I を搭載した警察車両、多脚警戒車が市民を無差別に逮捕していた。

彼女は一瞬、わけがわからなかつた。多脚警戒車は犯罪行為を A I が識別し現行犯逮捕する機能を持つてゐる。人間のパトロールを不要にした革新的な技術だ。当初こそそれは A I が誤認逮捕する可能性を懸念されていた。しかし、その A I がまちがつたことなど、これまで一度もなかつた。

しかし現に逮捕されているたくさんの通行人がすべて犯罪者だとは、テーリにはにわか

には信じがたいことだった。

(A-Iのバグ? かれらは犯罪者には見えない。でもあれはシンガポール・ロボティクスの多脚警戒車。バグだともやつぱり思えない……)

カーテン越しに、12階の窓の外からセキュリティ・ドローンが彼女を見つめた。

テーリはそのドローンのカメラと眼があい、なぜだかとてもおそろしく感じた。

衝撃音。

マンションの1階のフロントサッジが多脚警戒車に破壊された音だ。

(ひ……)

マンションの住人がつぎつぎと逮捕され始めた。奴らが12階を訪問するのも、時間の問題だった。

テーリは慌てず冷静にニュースを見た。

(落ちつけ、テーリ。まだ時間はある。まずは情報を集める)

ホワイトアース・ジャーナルの記者が報道をしていた。

『緊急ニュースです。これは現在の状況です。世界各国でドローンが一斉に暴走し市民を襲っています。SNSで共有された映像です。ニューヨークは大混乱で特殊部隊が出動。しかし軍用の無人機さえすべて動作せず作戦は難航しています。ロンドン、パリ、東京。上

海、北京、香港。NSA長官のコメントがあります

ウォーターズ長官が取材陣に囲まれて いる映像。

『これは世界同時多発テロだ。安心してほしい。すでに手は打つてある』

『中国のサイバー攻撃だという噂についてどう思われますか?』

『否定も肯定もできない。現時点では証拠不十分だ。しかし、中国でも同様の事件が発生しているとだけは言つておこう』

『さきほど述べた対策とはなんでしょう』

『この場では公表できない』

『全世界の市民に向けてなにかコメントはありますか?』

『これはサイバーテロだ。大規模な攻撃なので混乱するのはわかる。しかし敵は私たちと同じ人間だ。奴らを逮捕すれば必ず収束する。だがNSAの人員だけでは手が足りない。全世界のエンジニアの力を貸してほしい。いやエンジニアでなくともかまわない。電話等小さなデバイスでも計算資源を提供してもらえば解決の一助になる。方法は簡単。いまから言う番号にかけてもらえれば自動でコネクションが確立し……』

このとき彼女は決心した。

そしてついに多脚警戒車がエレベーターで彼女のいる12階までのぼってきて扉を勢い

よく叩いて破壊を試みていた。扉は頑丈だが数分も持たないだろう。

彼女はテロリストがドローンをハイジャックしていると理解しており、敵にできるなら彼女にもできると、そう確信していた。

彼女は持てる知識のすべてをもちい、多脚警戒車のリバースジャックを試みた。

いまにもドアを破壊せんとする多脚警戒車。その脆弱性を自室にある設備だけで特定しそれを利用して特権昇格を試みるのだ。

多脚警戒車はほかの多脚警戒車と連携するためにP2P通信をおこなっている。ゆえに彼女のラップトップにそのプロトコルを喋らせればほかの多脚警戒車と会話できる。

『ここにはだれもないぞ』

テーリはそう多脚警戒車のプロトコルで喋った。

すると多脚警戒車は行動をぴたりとやめ12階の搜索は完了したと判断。続いて13階へ向かった。

(だめ！ 11階までのみんなには申し訳ないけど、せめて13階のひとたちだけは)

P2P通信は公開プロトコルで偽装は簡単。人間がうそをつくくらいの効果しかない。だから目のまえにいる人物がいない、とP2P通信で言っても多脚警戒車は騙されない。今回は扉越しで姿が見えない状況だったためたまたまくいっただが、特権昇格によつて制

御を完全に掌握するまでは安心したとは言えない。

テーリはひとまず時間稼ぎをしてこのあたりに配備されている多脚警戒車の型式およびそれに存在する脆弱性の情報を調査した。

簡単に利用できそうな脆弱性はなかった。しかしひつだけ可能性のあるものがある。多脚警戒車に物理アクセスしUSBポートから攻撃プログラムをインストールする。それがP2P通信によってほかの多脚警戒車に共有されることですべて同時に特権昇格が可能という緊急度の高い脆弱性だ。これはこの型式の多脚警戒車にしか見つかっていない。

（もしテロリストが先手を打つて脆弱性を塞いでいたらアウトだ。賭けるしかない！）

彼女は攻撃プログラムをダウンロードして余っていたUSBメモリにコピー。それから思いきってドアを開け廊下に出た。マンションの管理人の仕業かエレベーターが緊急停止していく多脚警戒車が立ち往生しておりテーリと目が合った。

（ひいっ！）

テーリはてっきりそれがすでに13階へ向かったものだとばかり思っていたので驚いた。

『ハンザイ……ゲンコウハン……ハッケン……タイホシマス』

多脚警戒車の合成音声は現代の技術水準からすると機械的すぎるが、それは機械らしい見た目のものに人間すぎる声は似合わないという、人間側の要望によるものだ。

ハイジャックされた多脚警戒車は現行犯には厳しい。有無を言わさず突進し、抱きつくように彼女を捕まる。しかしあくまで逮捕であつて殺害を目的にしたドローンではないため、テーリは拘束されたものの無事だった。

それは彼女にとつてむしろ好都合だった。多脚警戒車のUSBポートは側面にあり彼女でも手が届く位置にあった。

「残念だったね。人間の言葉はわからないと思うけど。きみはこれで、元通りだ！」

彼女はメモリを多脚警戒車のポートに突き刺す！ 攻撃プログラムインストール！

—H I J A C K C O M P L E T E D —

その多脚警戒車を中心に攻撃プログラムがあつという間にP2P通信でカリフオルニアのあちこちに広がる。型式が違うものには影響がなかつたがかなり大部分がそれによつて正常化した。

テーリを捕まえていた多脚警戒車も大人しくなり彼女を放した。

『ゴニンタイホ……シャザイシマス……』

彼女はなんだかこの多脚警戒車がかわいく感じてしまいきゅんとなつてしまつた。彼女はそのドローンの頭というべき部分をなでなでしてあげた。

「よしよし。いいよ、きみは悪くない。悪いのは……」

まだすべてが解決したわけじゃない。だが彼女はこのときすでに決心を固めていた。  
テーリはパンプキン・セキュリティを訪問した。

「ぼく、決めました！ NSAに就職します！ この事件の解決に協力したいんです！」

NSA支部のそこには本部にいるはずのウォーターズ長官やマウンテン大尉らもいた。  
テーリはてっきりかれらが本部のほうにいると思っていたのでどぎまぎしてしまった。

「ウォ、ウォーターズ長官!? どうしてここに？ 本部にいるはずじゃ？」

「それが残念なことにテロリストは真っ先にNSA本部を制圧してしまった。私はそれを危  
惧してあらかじめ本部を臨時的に移管する準備をしていた。ここが現在の臨時本部だ」

「そ、そうなんですね。ってことは事件が起きるとあらかじめわかっていた……？」

「ああ。NSAはテロの計画を察知し何年もまえから対策を進めていた。それらについてひ  
とつひとつ説明する時間はない。だがきみの力は必ず助けになる。これからよろしく、ミ  
ナガワ・テーリさん」

「はっ、はい！ よろしくお願ひしますウォーターズ長官、そしてNSAのみなさま！」